



分娩(ぶんべん)を扱う医療機関による退院(出産)後の母親支援が好評だ。育児相談やママ友づくりを目的にした母子交流の場は現在、自治体の子育て支援センターなどが主流。ただ、母親の中には、知人不在の場に向くことに不安を感じる人もあり、「出産した病院は別格の安心感」と信頼を寄せらる。

「入院中の5日間、苦労を共にした仲間も先生もいる。話しやすい」。浜松市内の会社員山口澄恵さん(33)は2016年に第1子を出産した木村産科・婦人科(同市北区)に毎月1回通う。同年始まった赤ちゃん同窓会に参加するためだ。助産師による育児相談と体重測定にベビーマッサージなどを盛り込んだ2時間の会。生後1カ月から半年までと、半年から1歳までに分け、各15〜20人を定員に月1開催でスタートしたが、参加者が多く、午前午後の2部制に変更したという。木村院院長は「特に1カ月健診から3、4カ月健診までの間、核家族化などで身近に頼る人がな

産院 ママの交流の場に



助産師とともに、穏やかな時間を過ごす母子ら。11月下旬、浜松市北区の木村産科・婦人科

く家にこもり、母親がうつ状態となる状況を防ぐことが必要」と独自支援に至った理由を語る。浜松市内では、かば記念病院(東区)が生後2カ月の母子向けに「プチマ士レディースクリニック

(加藤愛己)

県内広がる産後支援 気軽さと安心感好評

(富士市)が同年から、生後2、3カ月以降の母子交流会「ベビーマーケティング」を開くなどしている。

総合病院では聖隷浜松病院(浜松市中区)や市立島田市民病院が独自支援に力を入れている。先駆けは静岡赤十字病院(静岡市葵区)の「ママサロン」。カナダの育児支援プログラムの考え方を取り入れた連続3回講座で、生後3カ月までの赤ちゃんを院内で預かり、母親の会としている点特徴だ。06年の開始以来、参加者は延べ1340人になる。静岡市内に里帰り中という第111期生の倉光真悠子さん(32)は今年1月に参加するまで、抱っこでなければ寝てくれない第1子の育児に行き詰まっていたという。日中は母子2人きり。公的支援の存在を知る機会はなく、産後で新しい場に飛び込む心身のパワーもない。「でも出産した病院なら知った顔があった、ハードルが下がる」と話す。

特集面45